

中国広西の壮族とベトナムのヌン族との移動、交流、ネットワーク

著者	塚田 誠之, Tsukada Shigeyuki, ツカダ シゲユキ
雑誌名	民博通信
巻	126
ページ	4-6
発行年	2009-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/4555

中国広西の壮族と ベトナムのヌン族との 移動、交流、ネットワーク



東興・モンカイの国境線。ここは中越国境の40あまりの交易拠点のうち比較的規模が大きい。



写真1 ヌン族の木造高床式住居。伝統的な、竹を編んで外壁としたもの。今では少なくなっている（チャリン県）。

同系の民族が中国と東南アジア大陸部諸国とに分かれて居住する場合は少なくない。中国の壮（チワン）族とベトナムのヌン族もその一例だ。壮族は、中国の広西壮族自治区を中心に居住し、約1618万人（2000年）と、中国の少数民族のうち最大の人口を有する。ヌン族は人口約86万人（1999年）でベトナム少数民族のうち6番目の人口をもち、ランソン・カオバン・クアンニン・ハザン・トゥエンクワン・ラオカイなどの省に居住する（伊藤2003）。

移住によって生じた文化変容

范宏貴によると、ヌン族は広西から移住して200～300年の歴史をもつという。さらに広西のなかでもベトナムに近い西南部が故地である（范1989）。筆者の調査では、移住の時期に幅がみられることから、移住が小規模集団によって波状的におこなわれたことがう

かがわれる。なお、ここ数十年の間にヌン族になった人もいる。ベトナム・カオバン省チャリン県の中国国境に接したヌン族の村で調査をしていたときに、かつて中国から嫁いで来た老婆たちに出会った。Aさんは現在78歳、Bさんは68歳、それぞれ20歳、23歳のときに嫁いできたという。

（1）衣食住

壮族とヌン族の間には共通点が多い。女性の「伝統的」衣装は藍色か黒色の上着と黒色のズボンである。行事用の食品として搗きモチ・オコワなどモチ米食品を用いる。住居は一層に家畜を飼養し二層を人間の居住空間とする高床式住居が特徴的である（写真1）。しかし広西では近年、経済発展が進む沿海部に出稼ぎへ行った人が高床式住居からブロックのビルに建て替える場合が多く、農村の景観が一変しつつある（写真2）。壮族の住居では通常、イス・テーブルが用いられるが、ヌン



写真2 広西側では農村の景観がこのように変わりつつある(靖西県安德鎮)。

族には、階段を上る前に靴を脱いで入り、床上にゴザを敷いて座る、より古い形態が残されている。玄関に入って正面奥に祖先や神を祭る祭壇が設けられ、赤い紙に漢字で神名が書かれる。ヌン族の場合、漢字を書くことのできる者は道士(ブダウ)や村の老人に限定される。共通語普及政策のためヌン語のほかベトナムのマジョリティの言語であるキン語を話す者が多く、漢語を話す者は稀である。壮族が国境地域でも漢化の度合いが強いのに比べて、ヌン族の場合、キン族の影響は強くないようだが、それでも言語面では影響を受けている。キン語の習得、漢字・漢語能力の衰退はベトナムへ移住した後に生じた大きな変化である。

(2) 婚姻・生育習俗

壮族もヌン族も花嫁が結婚式の後に実家に戻り、一定の期間、花婿と別居する習俗「不落夫家」をもつ。近年は別居期間が短縮され形骸化しつつある。先の中国から嫁いだAさんたちの場合も別居は短期間だった。ヌン族の場合、道士が男女の相性占いをし嫁入りの日時を決め、嫁入りの先導をするなど婚姻に重要な役割を果たす。壮族にも婚礼のさいにお経をあげて邪気を払う習俗がある。子供の出生にさいして、出生の3日後あるいは1カ月後に祝いがおこなわれる。とくに後者の「満月」の祝賀は盛大だ。AさんやBさんの婚礼でも、中国から親族が背負い帯や米などの祝いの品を持ってきた。道士が祖先に子の出生を報告し子供の守護神「花王」「花王聖母」(メイワー)を安置し拝む。Aさん、Bさんの家の祭壇にはその神の名が書かれている。この点は壮族と変わらない。

(3) 社会秩序を支える体制

壮族の場合、村落(自然村)の秩序維持のため、もめごとが発生した際の調停役として、

人民共和国成立以前には、村民が威信のある人「寨老」(ポーバン)に調停を依頼していた。その地位には流動性がみられたが、当事者・寨老間の個人的信頼関係は基本的に村落の内部で結ばれた。一方、ヌン族は調停者を「老人」(ゲンゲ)と呼ぶ。しかし今は、調停役は政府の役人にとって代わられている。

村落の秩序維持にかかわる組織として年齢集団がある。壮族の場合「ホーギー」など、ヌン族の場合「バンヨウ」と呼ぶ。男女ともに各世代にあり、13、14歳ごろに加入する。女性の場合、結婚や出産を機に疎遠になる場合が少なくない。Aさんの場合、若い時には村に多くの友人がいて、いっしょに牛の放牧、農作業をし、暇があればいっしょに遊び、食事に招きあったが、結婚してそれぞれが家庭をもつと付き合いは減っていった。年齢集団については目下、研究を進めているが、壮族・ヌン族ともに宗族組織が発達せずに村落内での結び付きが強く、そのために村落を越える連帯が生じにくく、ひいては大きな政治権力の形成に至らなかったものと考えられる。寨老や年齢集団は壮族・ヌン族の社会を解く鍵として注目される。

交流とネットワークのありよう

(1) 交易

国境貿易は、1983年頃から民間で開始され、1991年の中越国交正常化以降、国家、民間レベルで特産物の交易が盛んにおこなわれてきた。それはおもに原材料(ベトナム)と加工品(中国)の交易という形であった。兼業農家が親戚を訪問するついでに商売することも多い。近年は、壮族のなかにも漢族の商法を会得して、零細な行商から大規模な商人になる者が輩出している。

今では特産品だけでなく、牛肉、豚肉、米、野菜、果物などごくりふれた食材も両国間の価格差に応じて交易される。中国の靖西県のベトナムとの国境に位置する村(写真3)では平地に造成された水田が国境線を越えて広がっており、どこが国境線なのか、言われてもわからないほどだ。遠くに(ヌン族と近縁と考えられる)タイ族の村が見える。タ

イ族は人口147万(1999)、国境近くに広く居住しており、ヌン族よりはキン族の影響が強いようだ。この村に住む男性Cさん(54歳)は、役牛を仕入れて村から5キロほど離れたベトナムのチャリン県街区で5日に1度立つ定期市のたびに牛を運んで売って生計を立てている。商売に成功して建てた3階建ての豪華なビルは村でも人目を引く。ベトナムで牛肉を売ると2007年4月の時点では中国の倍で売れた。食用のほか牛皮を靴やベルトに加工するという。また豚肉の価格が2007年から2008年にかけて中国で高騰したさいには人びとは争ってベトナムから輸入した。店舗へ行く以外にも天秤棒で商品をかたいで売りにくる場合も少なくない。ともあれ定期市・市場への距離の近さも選択肢のひとつである。人びとは国境にかかわらず近くて廉価なほうから購入する。国境地域では両国の貨幣がともに通用するが、定期市に行けば両替屋がいて大口の買い物に便利だ。

(2) 親戚・友人のネットワーク

壮族/ヌン族では互いに親戚・友人関係にある者が多い。また親戚・友人をたよって商売をする者が少なくない。Cさんは、幼小的时候から国境の向こうの村のベトナムのタイ族の友人といっしょに牛の放牧をし、長じても交流しているが、そうした友人が商売の手助けをしてくれる。行くとくに国境線まで出迎えに来て、通行や商売にさまざまな便宜をはかってくれるという。こうした場合や結婚式・葬式の通知には、定期市に行く人に伝言を頼むことが多い。

壮族/ヌン族には擬制的親族として男女ともに同年齢の相手と「同年」^{トクニエン}関係を結ぶ慣習がある。頻繁に往来し結婚式や葬式などに出席し、親密な関係である。国境地域の場合、この関係が世襲される場合が少なくない。こ



写真3 国境の村。



写真4 天秤棒でブタ肉・豆腐などの食材を担いで売りに来たところ。両国国境で日常的に見られる光景だ（憑祥市）。



写真5 国境近くの定期市。両国の人びとが入り混じる（靖西県岳墟郷）。

これは中国国内でもみられるが、ヌン族との場合、関係が3代続くこともあり、それ以上は親戚になるという言説がある。なぜこの関係が国境を跨いだ場合により必要とされるのか、そこには政治に翻弄されつづけた国境地域の住民の知恵があるのかもしれない。

ところで、近年顕著なのは、農繁期にベトナムから中国へ出稼ぎに来る現象である。Cさんの村にも田植えや米・トウモロコシの収穫期に大挙して来るという。中国側の労働力が沿海部へ出稼ぎという形で流失しており、その労働力の不足をベトナムからの出稼ぎで補っているのである。Cさんの住む人口260人程度の小さな村からも若者たちはこぞって沿海部へ行ってしまった。こうした東アジアで進行中の新たな人口移動の動きからは目が離せない。ベトナムからの労働者は、親戚・友人・同年関係にあるもの、もしくはその紹介で来る場合が多い。出稼ぎもこうしたネットワークを通じてなされているのである。

(3) その他

Aさんは若い時、牛の放牧をしていた時に夫たちのグループと国境を越えて歌を掛け合った。歌掛けはかつては配偶者選択の場であったが、今は人びとの娯楽の場だ。Cさんも

子供の時に大人に連れられてベトナムの歌掛けを見にいったことがあるという。最近は歌掛けが若者層では流行していないが、それでも中国靖西県で政府が主催する歌掛け祭りにベトナム歌手が招待されたり、ベトナム、チャリン県の歌掛けの際にバスケットボール大会が催され、中国側からも参加するなど、活動は続けられている。

儀礼の際に壮族・ヌン族ともに道士を呼ぶ。中国側で旧暦2月2日の土地公祭りの際にヌン族の道士を招聘する場面を見たことがある（写真6）。ベトナム側が中国人道士を呼ぶことも多いが、その背景として、ベトナム側での漢字の書き手としての道士の高齢化、減少という現状がある。先述のようにベトナム側では漢字・漢語能力が衰退する傾向にある。Aさんの家でも故郷の村の近くから壮族の道士を呼んでいる。これには壮族とヌン族の言語の共通性が前提となっている。

なお、国境地域に住む人の多くは

「中越国境地区出入境通行证」を持つ。交易に従事する者は別に「互市証」を持つ。しかし実際には、両国の税関や边防所の人員と顔見知りで、通行证を提示せずに通過する場合も少なくない。Aさんは「去年、牛の放牧をしていたら急に故郷がなつかしくなってそのまま帰ったよ」と言う。またBさんは通行证を持っておらず、旧正月や親戚の婚礼などの際にたびたび国境を越えて帰省をしているが、顔なじみの中国の公安からは追及されたことがない。「彼らは年寄りを調べたりカネをとったりしないよ」と言う。ともに故郷は山道を歩いて1時間ほどで近い。約1300 kmにもおよぶ国境線を横断するすべての道に国家の機関が置かれるわけではない。親戚・友人のネットワークが越境の手助けをする場合も多い。建て前としては国境線の通行

には国家が関与し、国境を越える通行には手続きが必要であるが、実際に国境に暮らす人びとはそうした手続きを経ずに、ネットワークを用いて往来しているのである。

国境の意味を問い直す

伊藤正子がかつて、タイ族・ヌン族を対象に、国家による「国民化」の側面を強調し、清末・民国期の比較的自由的な「民族の世界」がドイモイ以降、国家の存在に制約されるように変化したことを指摘した（伊藤2003）。確かに国家による個々の国民に対する統治は強まっている。しかし国境に暮らす壮族・ヌン族の人びとの日常生活圏は政治的な国境線を越えることが多い。Aさんたちの例を出すまでもなく、行商や牛の放牧、歌掛けへの参加、道士の招聘など日常的に国境線を越えてきた。人びとは国境やそれを可視化する税関・边防所などの施設を熟知しており、国境線を意識しないわけではない。しかし彼らの目線から見ると、国境の存在を意識しながらも、さまざまな対策でそれを相対化しているのではあるまいか。そこに暮らす人びとの立場から国境の果たす意味を問いなおすことが今とめられている。

参考文献

- 范宏貴1989『我国壮族与越南岱族・僮族的古今関係』范宏貴・顧有識編『壮族論稿』広西人民出版社。
- 伊藤正子2003『エスニシティ（創生）と国民国家ベトナム：中越国境地域タイ族・ヌン族の近代』三元社。



写真6 ベトナムから道士を呼んで儀礼を行うこともある。土地公祭り（憑祥市隘口鎮）。